

第15部会

白い布を舞手がつかみ登り降りする(周南市大字夏切)。その布を持って舞うところもある(防府市旦)。【事例四】「川名津神楽」(愛媛県)。柱松のてっぺんに白い布をかけ、ダイバ(鬼)がその柱松に登って藁人形と白い布を落として燃やす(八幡浜市川上町川名津)。ほかに、備中荒神神楽(岡山県)の布舞、大元神楽(島根県)の御綱祭、山代神楽(山口県)の山之神、周防神舞(山口県)の芝鬼神などで白い布が使われる。これらの事例から、白い布は荒神神楽祭祀でのみ使われる、荒神を迎え・遊び・送るとき使われる、神がかりと深く連動していることがわかる。しかし白い布がどんな神霊と関わり、何故神がかりと連動しているかは不明である。それを解く手掛かりは中国と韓国の民間祭祀の中にあると思う。

三、中韓の民間祭祀で使われる「白い布」【事例一】韓国の民間祭祀で白い布が頻繁に使用されている。その由来は死霊祭祀(チノギクツ、シツキムクツ、オグクツ)にある。白い布を裂いたり(裂布)、結び目を解いたり(コプリ)する。【事例二】中国長江中流域の死霊祭祀で白い布が使われている。「除霊」(苗族)や「打繞棺」(土家族)では祭場正面に白い布を張り、頭に白い布をかむった遺族たちが霊屋や棺桶のまわりで順逆の歌舞を繰り返す。「道場」(土家族)では祖霊迎えの迎真、死霊迎えの地獄破り、死霊清めの目連斎で白い布が使われる。変死霊を対象にするときは赤い布を使う。尚、榆林窟(甘肅省安西県)第二十五窟南壁の浄土図「観無量寿経変図」(中唐期作)に阿弥陀仏から諸菩薩へ伸びる白い布が描かれている。敦煌莫高窟にこの白い布は描かれていないので、白い布は東アジ

ア共通の伝統として唐代以前から死霊祭祀に使用されていたと考えられる。

四、まとめ 中韓の事例から白い布はもっぱら死霊祭祀で使われ、死霊や祖霊を迎えたり、清めたり、送ったりするとき使われている。このことから白い布を使う荒神神楽祭祀も死霊祭祀に由来し、荒神の霊格は死霊や祖霊であると考えられる。また神がかりはこの死霊や祖霊を迎えたり送ったりするさい発生する。したがって日本民間神楽はタマシズメとタマフリの両要素が複合していると考えたほうがよい。

薪能の興行形式にみる宗教性

永原 順子

そもそも薪能(新猿楽)は、九世紀頃、大和春日大社の神事もしくは、興福寺の修二会の薪宴(たぎのえん)Ⅱ修二会に使う薪を迎える儀式に始まるといわれる。

一方、戦後からはじまり、いまや全国に広がっている「薪能」はかなりイベント性の高いものとなっている。中には、能そのものを社寺に奉納する形をとるものもあるが、その興行形式は多種多様である。

先行する研究はあまり多くない。あっても能評やイベントの状況報告、薪能の歴史、などに集中しており、包括的なものが見られない。数が多かったり、不定期なものがあつたりと、全

体的な把握が困難であるということが理由であろう。

表題に掲げた宗教性であるが、能自身の宗教性については、死生観、異界観、鎮魂、など、命題はいくらでも立てられる。しかしこの発表では、能の内容には触れず、薪能の多様な興行形式のなかに、どのような宗教性、さらにいうと宗教的なものがあるのか、に着目する。

薪能は、戦後、野外能の流行した際に生まれ、高度経済成長期の昭和四十年代にブームを迎えて、雑誌「観世」の平成四年の特集では、全国で百七十カ所を超えている。主催は、企業、地方自治体、宗教団体、NPO、能楽師自身、などいろいろである。薪能の見方、というようなマニュアル本も流行る。

バブルがはじけた後、後援の企業などが減少したり、地方自治体も手を引いたり、薪能の数は減少した。しかしここ数年、少しずつ増加している。最近の傾向として、社寺以外に、城やその物語の舞台ほか、都会の駅や広場など、多様な場所での開催が増えてきている。仮設舞台の技術が進んで、手軽に開催できるようになったのも一つの要因であるという。

では、なぜ公演数が微増しているのか。仮説舞台の技術が進むためには、それなりの需要が必要である。その需要が起るものとしては、能楽師による能楽の普及努力、自治体の町おこしの一環、伝統を守り伝えようというボランティアの努力、などがあげられる。

公演増加の理由としては、次にあげる「興行形式にみられる宗教性」も想定できる。

神社で奉納のかたちをとるものも長く続いている（奉納靖国

神社夜桜能、生國魂神社薪能、平塚八幡宮神事能、など。古来の薪能とまったく同じとは言えないが、奉納するという点は同じであり、そこでの宗教性は言うまでもない。しかしここで注目したいのは、そうした「見える宗教性」ではない。

まずは薪能が開催される場所の聖地性があげられる。築城〇〇周年にその城をバックに、実際に物語の舞台である場所で、など、意味のある地点で行われているものが多い。もつと言え、都会の駅は現代の四つ辻で、そこは宗教の場でもあり芸能の場でもあるだろう。

ほかには、町おこし、ボランティアによる伝統へのこだわり、など、ある対象に向かう強い意志がみられる。これは、宗教性とまではいかないが、信仰心、崇拜心と似通ったものがある。

野外能の流行と先述したが、なぜ昼ではないのか。神社の奉納は昼も多いが、いわゆるイベント的なもので野外となると、そのすべてが薪能といっても過言ではない。そこには、篝火とともに舞台が闇に浮かぶという幻想的な演出効果があるからだ。

以上から、伝統、幽玄、世界遺産という「神」を崇拜した擬似的祭礼としての薪能の姿がそこに見出せる。